
夢限の自由 ~ 僕等は不屈のFighter ~

G・M・ルイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢限の自由 ～僕等は不屈のFighters～

【著者名】

ZZコード

G・M・ルイ

【あらすじ】

この作品は鬼道と春奈と2人の幼馴染が様々な敵と戦つて自由を手に入れるという物語です。また、この作品にはドラゴンもかなり出てきます。

(サッカーはしますが、メインにはならないかと…)

初めて書く作品で、誤字脱字も多いと思いますが精一杯努力するのでよろしくお願いします。

再会と窓を眺める少女（前書き）

この作品は作者の想像で、本編とはほとんど関係ありません。
誤字脱字が多く、読みにくい部分も多いのかと思いますがよろしくお
願いします。

再会と空を翔る少女

目が覚めると、そこはいつも自分の部屋ではなかつた。じばらくして鬼道は昨日から合宿に来ている事を思い出した。

（確かにこは、あの孤児院の近くだつたよな…）

近くにあつた時計を見ると、まだ五時を過ぎたといつだつたがもう眠れそうになかつたので着替えて顔を洗つていふと窓の外に春奈の後ろ姿が見えた。

（…春奈？）

鬼道は、急いで外に出ると春奈のいた場所へ走つた。

「春奈？どうした」

「お兄ちゃん…お兄ちゃん！」こんな時間にびびついたの？」

「俺は目が覚めて顔を洗つてたら！」お前がいたから…」

「私も…今日は早く目が覚めたの。…それで…ここってあの孤児院のすぐ近くでしょ。なんか、それ思い出したらこじもたつてもいられなくなつちやつて…」

「わづか…」

それから、2人はそこで孤児院での思い出を話しあつた。

「お兄ちゃん覚えてる？よく3人であそんだよね…」

「ああ…。俺と春奈と…真弥と…」

「真弥さん、今どうしてるのかな……」

「なあ、春奈。今日あの孤児院に行つてみないか」

「えつ……？」

春奈は驚いていたが、とても嬉しそうだった。

そして、この2人を近くから見守る者が2人、正確には、1人と1頭がいた。

中学生か小学生位の少女と、隣には純白のドラゴン。ドラゴンの大きさは、高さが3m、体長が5m、翼を広げたら8m程の大きさだ。

「有人……春奈……元気そうで良かつた……」

少女は悲しそうに呟いた。

隣で、ドラゴンは心配そうに少女の顔を覗き込んだ。少女は、静かに泣いていた。

「……そろそろ戻るか？ シェルリア」

シェルリアと呼ばれたドラゴンは少女に

「真弥がそれでいいならいいけど……本当にもう行つていいの？ もう会えないかもしないんでしょ……？」

と言つた。

どうやら、この少女は真弥というらしい。

「これ以上彼らを見ていても辛くなるだけだしね…。僕はもう、サツカーできないんだから。」

（真弥……普段は辛くないフリしてるけど、やつぱり本当はサッカーやりたいんだ……）

真弥は、シェルリアに乗つて2人から少しずつ遠ざかっていった。後少しで、完全に2人が見えなくなるといつ時後ろで春奈の悲鳴が聞こえた。

「春奈ツ！？」

真弥は思わず叫んだ。

鬼道と春奈は孤児院の思い出を話し終え、それぞれの部屋へ戻ろうとしていた。

しかし、ドアの前に2匹の大きな一ホンマムシがいた。

春奈は思わず悲鳴を上げた。

1匹のマムシがその声に反応して春奈に飛びかかった。

「春奈ツ！…危ないツ！…」

鬼道は春奈の手を引つ張つてぎりぎりの所でマムシの攻撃をかわした。

だが、後ろにまわっていたもう1匹のマムシがもう一度飛びかってきた。

鬼道はまたかわそつとしたが…

(間に合わないッ！！)

そのとき頭上で聞いたことのない音が聞こえた。

その声を聞いたとたん、マムシたちは動きを止めた。

上を見ると、1匹の白いドラゴンが頭上を旋回していた。

ドラゴンには人が乗っていたが、離れていたうえに逆光で鬼道達からよく見えなかつた。

だが、あの変わった音は確かにドラゴンに乗つた人の声で、その声からドラゴンに乗つている者は少女らしいことが分かつた。

(まさか…アイツは……真弥！？)

気づいたら、マムシはもういなかつた。

そして、頭上のドラゴンも飛び去りうつとしていた。

鬼道はとつと叫んだ。

「待てッ！お前、真弥かッ？」

春奈の悲鳴を聞いて、真弥はすぐに2人のところへ戻つた。
真弥が行つたとき、1匹のマムシが春奈に飛びかかつていた。

(危ない！！)

だが、これは鬼道が春奈の手を引っ張つてかわした。
しかし、後ろにまわつていたもう1匹のマムシには反応が遅れた。

『やめろ！彼等は僕の友人だ！』

真弥は思わず叫んだ……蛇語で。

マムシは攻撃を止め去つていつたが、2人に気づかれてしまつた。急いで飛び去り、としてシェルリアに

「行くぞ」

と言つたときはもう遅かった。

「待てッ！お前、真弥かッ？」

鬼道に気づかれた。

シェルリアは動きを止めて小声でたずねる。

「ばれちやつたけど……どうあるの？ 真弥？」

「逃げるッ！」

小声でそつ答えると、真弥とシェルリアは去つていつた。

「くッ……逃げられたか……」

鬼道は悔しそうに呟いた。

「お兄ちゃん……さつきの人が真弥さんつてどうゆうひと……しかも、あれつて『ドリゴン』じょ……『ドリゴン』って空想の生き物じゃないの？」

「こや……『ドリゴン』は実在する。春奈もあの白い『ドリゴン』見ただろ？」

彼等は、普段決して人前に出て来ない。だが、あの時真弥が春奈の悲鳴を聞いて俺たちを助けに来たんだ。」

「ふうん… つていうか、なんでお兄ちゃんドラゴンがいるって知ってるの？」

「… それは後だ。それで… なんで真弥つて分かつたかつてゆうと… アイツ蛇の言葉話してただろ？」

「えつ… うん。でも、なんでそれで真弥さんつて分かるの？」

「春奈は覚えてないか？… 真弥… 動物とすつじい仲が良かつただろ。」

「

「そ、ういえば… 孤児院に時々来てたあの黒い野良犬… 真弥さんが来るまではスゴイ凶暴だつたけど、真弥さんが来てからはおとなしくなつて… よく遊んだよね…」

「ああ、だから俺きいたんだ。どうやつて動物と仲良くなるのかって。」

「それで… なんて言つたの？」

「『動物達と話してるだけだ』 つて言つてた。最初は俺も信じなかつたけど、真弥が実際に見せてあげるつて、動物と会話したんだ。…俺の目の前で。近くにいた猫を猫語で呼び止めて、高くジャンプさせたりその場で回転させたり…。猫は、真弥の言つとおりに動いたんだ。」

「それで分かつたんだ…」

「で、なんでドラゴンの事を知っているかだが……ちょっと待って
くれ。」

再会と空を翔る少女（後書き）

……なかなか物語が進まない……

次回は他のメンバーも出てくると思います……多分。

少女の秘密　？（前書き）

相変わらずの駄文ですが、よろしくお願ひします！！

少女の秘密　?

鬼道は自分の部屋に戻ると鞄の中から一冊の古い本を取り出した。表紙には『ドラゴン学　著・ルアン』と書かれていた。鬼道は少し悲しそうにその本を見つめた。

（真弥…）

しばらくして鬼道は春奈のところに戻ってきた。春奈はさつきの場所にあつたベンチに座つて鬼道を待つていた。

春「その本…。真弥さんが大事にしてた…」

鬼「そうだ。俺が孤児院を出るとき真弥がこの本をくれたんだ。」

春「『ドラゴン学』…。ルアンって…誰…?この本を読んでも兄ちゃんはドラゴンはいるって思つてたの?」

鬼「そうだ。もちろん、この本が本当だという証拠はないが、あの真弥が大切に持つていた本だつたから俺はこの本を信じドラゴンはいると思つてた。だが…俺がドラゴンはいるって思つてた理由はそれだけじゃない…」

春奈は不思議そうに首をかしげた。

春「どうこう」と…

鬼「なんというか…この本を読んでいると本当にドラゴンっていう

んじやないかって思えてくるんだ」

春「読む……だけで……？」

鬼「ああ。だが、これは言われてもあまり分からないだろ？。春奈も第1章だけ読んでみる。」

春「う……うん。」

そういうて春奈は鬼道から本を受け取り、読み始めた。本は第1章から第21章まであり約2500ページほどだつた。その中で第1章は最も短い章で、たつたの10ページ前後しかない。第1章にはドラゴンについての簡単な説明や、ドラゴンの写真が載つていた。春奈はすぐに第1章を読み終えて本を鬼道に渡した。

鬼「どうだ……？」

春「確かに……ドラゴンはいるついで気になるわね……」

春奈は、自分がドラゴンは存在すると思つていてる事に驚きながら言った。

鬼「この本は、今から100年近く前に書かれたものでこのルアンという人物は唯一ドラゴンと『ミニケーション』をとれた人なんだ。真弥は……俺にこの本を渡す時……いつか自分もこの人になると言つていた……。真弥は……なつたんだ……『ルアン』に……」

春「今日、孤児院に行つたらみんなに真弥さんのこと聞こつね……」

2人はそこで黙つたまま座つていた。

シェ「……あの人、あなたが真弥だつて気づいてたよ……？」

真「うん……でも、きっとこの場所までは有人でも分からぬから……大丈夫だよ……でも……」

真弥は心配そうな顔をしている。

シェ「あの2人を心配してるので？」

真「うん……あの場所に二ホンマムシがいるはずないんだ……。もしかしたら、レナが2人を狙つて……。考えられないことじやないだろ？」

シェ「彼等、今日あの孤児院に行くと言つていたでしょ？もし真弥の読みがあたつていたら、きっとその時にもレナは何か仕掛けてくるんじやない？」

真「そうだな……。しばらく2人を見守つていたほうが良さそうだ。」

そう言つて、真弥はシェルリアに乗つて鬼道と春奈のいる場所へと向かつた。

その頃、鬼道達は円堂に今日の練習を休むことを伝えにきていた。

円「えーー。お前ら今日休むのーー。」

鬼「すまないな。円堂。どうしても今日行かなればいけないんだ。

「

円「そつかー。2人ともずっと行ってなかつたんだもんな。じゃ、行つて」

春「ありがとひびきりますー。キヤプロンーー。」

鬼「感謝する。円堂。…春奈、行くぞ」

春「うんー。じゃあ、行つてきます。キヤプロンーー。」

円「ねーひーー。じゃーなーー。」

そして、鬼道と春奈はあの孤児院へと向かつた。

豪「ん…？あの2人どこのくんだ？」

円「なんか、昔世話になつた孤児院にいくんだつてよーー。ここから近いんだつて。」

豪「そつかー。」

(今日の練習は春奈がいないのか…)

豪炎寺がそんなことを考えて落ち込んでいたことに誰も気づかなかつた。

鬼道と春奈は合宿場を抜けて、孤児院へと続く細い道を歩いていた。道は、昨日降った雨のせいでぬかるんでいた。2人は転ばないようにするのに精一杯で、黒っぽい服をきた男にあとをつけられていたことに気が付かなかつた。

鬼「大丈夫か？転ばないように気をつけようよ。」

春「うん。お兄ちゃんもね。」

鬼「ああ。」

鬼道は春奈に笑つた。…その時、後ろから黒い服をきた男が突進してきて、春奈にぶつかつた。

春・鬼「！！」

鬼「春奈ッ！？大丈夫か？」

春「うッ…足が…」

春奈は道に置かれていた石に足をぶつけ、起き上がれなくなつてしまつた。

????「『イツのようになりたくなつたら、お前はおとなしく従うんだな』

そういうて男はうずくまつていた春奈を軽く蹴つた。

鬼「貴様ツ！…」

鬼道は男にぶつかつていったが、男はびくともせず鬼道ははじき返されて地面の石に肩をぶつけた。

？？？「貴様らには、人質になつてもらう…レナ様のためにな…。鬼道有人…逆らえば妹の命は保障しない…」

そつ言つて男はポケットからナイフを取り出した。

鬼「くッ…春奈…」

鬼道はもう一度男に突進したが、今度もまたはじき返された。

？？？「馬鹿が…妹が傷つかなきや分かんないみたいだな。」

鬼「やめろッ！…春奈に手を出すな！」

鬼道が叫ぶが、男は笑うだけだ。そしてうずくまつて動けない春奈の腕にナイフを振り下ろした。しかし、その瞬間^{じまき}ガキンッという金属どうしのぶつかりあう音が聞こえて3秒後には男が地面にはじき飛ばされていた。春奈の前には…ブロンドの長い髪の毛の少女…真弥が銀の鋭い棒を片手に立っていた。

鬼「真弥…お前…」

真「僕の仲間を傷つけるやつを、僕は絶対許さない…。…大河、これはレナの命令だな」

大河と呼ばれた男はナイフを持って立ち上がった。

大「レナ様の命令は…………絶対だ！」

大河はナイフを構えて真弥にぶつかっていった。しかし、真弥は軽々とそれをかわして銀の棒でナイフを叩き落した。真弥はそれを捨いあげると、素手、しかも片手でそれを真つ一つに割つた。

真「お前は、僕についてきてもらおう」

大「クソッ！…」

大河はぬかるんだ道を走つて逃げようとした。しかし、5歩も進まないうちに大河の行く手を阻むように純白のドラゴンが降り立つた。

シエ「私がいる限り逃げらんないよ？」

真「ありがとう、シエルリア。有人と春奈とソイツを乗せてココから1番近い洞窟に行つてほしいんだが。」

シエ「OK！…でも、あの2人ドラゴンに乗れるの？」

真「ドラゴン乗れそいつ？」

鬼「俺は平氣だが…」

鬼道は心配そうに春奈を見た。春奈は今も鬼道に支えられてよつやく立つていらっしゃっている状態だ。

春「ドラゴンに乗れれば平氣だと思つた…。」の呟きや…

真「OK。シェルリア！」

真弥がシェルリアに呼びかけると、シェルリアはそつと両手で春奈を持ち上げ、自分の背中に乗せた。

鬼「…なるほど…」

真「有人は乗れるか？」

鬼「ああ。」

そう言つて鬼道はドラゴンに登り始めた。肩を打つてゐるため、動きはぎこちなかつたがなんとか春奈の隣までたどり着いた。

真「お前も乗れ」

真弥は大河を先に登らせてから自分もすぐにシェルリアの背に飛び乗つた。

5分程して、森の奥の洞窟にたどり着いた。乗つたときと同じよう春奈はシェルリアに下ろしてもらい、その後に鬼道 大河 真弥の順で降りた。

真「シェルリアは、ココでコイツ見張つて待つてもらえない？」
人と話があるんだ。…怪我の手当てもしないとだしな…」

シェ「分かつた。ココで待つてるね」

真「ありがとう。有人と春奈はついてきてくれ…春奈、歩ける？」

春「うん。大丈夫…」

鬼道と春奈は真弥について洞窟の奥へと進んでいく。洞窟は、一見小さく見えるが奥まで続いている入り組んでいる。洞窟の中には様々な部屋があつたが、人はいなかつた。真弥は、春奈のスピードにあわせてゆっくりと奥に進んでいき、少し広い部屋のようなどころで足を止めた。真弥は中に入り、2人をいすに座らせた。しばらくの間、誰も口を開かなかつた。

真「孤児院に行つてどうするつもりだつたんだ?」

しばらくして真弥は春奈の足を冷やしながら尋ねた。

鬼「お前を探そうと思つたんだ。朝、俺たちを助けたのは真弥だろう?何故あの時逃げたんだ?」

真「……僕はもう2人には会えない」

春奈の足に包帯を巻いて立ち上がつた真弥は氷を入れた袋を鬼道に向かつて放り投げ、「肩、冷やせ」とそつけなく言つた。

春「もう会えないって……どうして……?」

真弥は2人から顔を背けた。

真「……鬼道、その氷あげるからもう帰れ。春奈も、さつきよりは足痛くないだろ?。シェルリアに…シェルリアつていうのはあのドラゴンの名前だが…彼女に孤児院まで送らせるから…」

鬼「お前にとつて…俺たちは…邪魔か…?」

しばらくして、ようやく真弥が答えた。きつぎり聞き取れるくらいの小さな声だった。

真「…………そんなわけないじゃん…………。2人とも……大好きだよ…………」

鬼道と春奈は顔を見合させた。孤児院で3人はずっと一緒にいたがこんな悲しそうで辛そうな真弥は見たことがなかつた。しばらくして、鬼道が口を開いた。

鬼「お前に何があつたかは、分からぬ。だが、俺たちは絶対にお前の仲間だ。辛いなら、今は無理して言わなくていい。でも、俺たちに相談してくれたら俺たちはいつでも助けてやる……。お前が俺たちを助けてくれたみたいにな…………」

春「じゃあ、私たち『今日は』もう帰るね。……助けてくれて、ありがとう……」

真「うん……」

真弥は最後まで2人を見なかつた。…………真弥は声を出さずに泣いていた。鬼道と春奈には、顔を見なくても真弥が泣いていることが分かつた。

(何があつても俺たちは仲間なんだ……)

(今度は、私たちが真弥さんを助ける番だね……)

春奈と鬼道はこんなことを考えながら洞窟の出口まで歩いていた……

少女の秘密　？（後書き）

読んでくれてありがとうございます！！

明日から学校のスキー教室なので、次の投稿はかなり遅くなってしまうかと思います。.

次は…真弥の過去とか…豪炎寺のこととか書こうかなーーって思つてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2838ba/>

夢限の自由～僕等は不屈のFighter～

2012年1月10日21時48分発行